

択捉島

ビザなし訪問



ビザなし訪問に同行した長友隆典氏。ロシアが新設した紗那のサケマスふ化場前で



戦前に日本が建てた施設を基礎にした別棟の外観(上)と内部



旧日本の施設の飼育池の底は砂利。自然に近い環境を利用してはいた

北方領土のロシア人住民と元島民の日本人らが相互に行き来する「ビザなし交流」の今年度の日本側訪問団第一陣が6月1〜4日、択捉島を訪れた。急速に開発が進む島内でサケマスふ化場や水産加工場などを視察。同行した元水産庁職員で弁護士の大友隆典氏は「サケマス中心に水産業は拡大傾向。一方で観光業などにも力を入れ始めているが、水産業に頼る経済構造は変わらないだろう」と説明。日口両首脳で合意した海産物養殖など共同経済活動の動向を注目している。

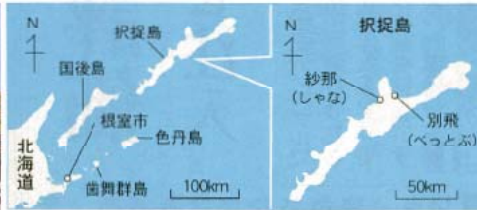
元水産庁職員

長友隆典弁護士が同行

急速に進む開発 サケマス中心に水産業拡大



④択捉島最大手企業・ギドロストロイ社が別飛に構える水産加工施設。⑤高揚げ岸壁から工場内にはバイリンギンで原魚を搬入



紗那のサケマスふ化場の内部。日本本土では見られない巨大施設

紗那に大規模ふ化場

日本の技術基盤、1億尾生産

別飛の加工場 いくら製造2000ト 国策で労働力確保

視察した紗那(シヤナ)のロシア国営サケマスふ化場は2128平方メートルの広大な敷地に施設が2棟。稚魚の生産尾数はシロサケとカラフトマスがほぼ半々の割合で計1億尾に上る。

1棟は戦前に日本が建てた施設で1990年代まではそのまま使用していたが、その後火災で建物が焼失し、残った基礎部分に建物を建て直して利用している。

河川をうまく利用し、施設内の飼育池に河川水を引き込んでいる。池底は砂利。飼育用水は上流から下流に流れ、稚魚が池内を泳ぐという自然に近い状態で飼育管理されている。

長友氏は「施設規模は日本本土の大規模なふ化場と変わらない」と説明。その上で「戦前の日本の技術がいまだに使われているのは、当時の日本の技術が非常に高かったということ。その高度な技術が北方領土に導入されていたことに驚いた」と話す。

もう1棟はロシアが新設し、択捉島最大手企業のギドロストロイ社が運営。「巨大な施設で、後日、北海道のふ化場職員に確認したが北海道をはじめ本州にもない大規模。日本にも劣らない増産技術を持っている」と感

また、同社が別飛に構える水産加工施設は、いくらや冷凍サケを主体にイワシ、オヒョウなどを取り扱う。庫容1800トの冷蔵施設を備え、いくらには年間2千トの生産が可能。ロシアのほか、欧米が主な出荷先だ。

常勤職員は約100人。8〜10月の繁忙期の雇用は500人まで増加。ロシア政府主導の手厚い年金支給や手当(3〜5年で段階的に支給。最終的にクリルは基本給の8割アップ)による定住策などで労働力を確保できている。

水産加工場は施設規模の巨大に加え、漁船の荷揚げ岸壁から工場内にパイプラインで原魚を搬入するなど鮮度・衛生管理も進んでおり「これほどの加工施設は日本でも珍しいと思われる」と示す。

今後、仮に北方領土での経済協力が進展し、貿易が自由化された場合、「日本の水産加工会社にとって強力なライバルになるだろう」と長友氏。一方で「逆に島に日本企業が進出することで豊富な水産資源を基に収益を上げることも可能ではないか」との印象を語る。